

グループ学習に困難を示す生徒とそれに対応する教師の指導・支援に関する研究

特別支援教育専攻

障害科学コース

M11092J

石井 弘佐代

第1章 問題と目的

2007年4月から特別支援教育が本格開始された。その根拠とされた2002年の文部科学省における「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」では、知的発達に遅れはないものの、学習面か行動面で著しい困難を持っていると担任教員が回答した児童生徒の割合が、6.3%であると報告されていた。「この調査によって、特別支援教育は明確に『通常学級の課題』となった」といわれている(是永、2007)。通常学級において、一人ひとりのニーズに合った特別支援教育が求められるようになったのである。

文部科学省による平成23年度特別支援教育に関する調査の概要によると、全国の公立幼・小・中・高等学校では「全体として体制整備が進んでいる状況がうかがえる」とあり、通常学校での特別支援教育の基礎的な体制整備は進んできているといえよう。しかし、南澤(2008)は、「担任教師が特別な支援を必要とする児童生徒を抱えており、学級経営に苦慮している」ことを明らかにし、腰川ら(2010)は、「特別支援教育の対象とならない児童・生徒の中にも授業への参加を促すために苦慮する児童生徒が存在する」ことを報告して、個別支援の対象とならない児童の授業への参加について、グループ学習や教師の声かけで改善されたことを報告している。

一方、通常学級での授業参加に困難を示す広汎性発達障害が疑われる児童生徒への対応に、担任教師が苦慮する場面にグループ学習があることも報告されている(興津、関戸、2007) また、中学校におけるグループ学習については、発達障害

支援との兼ね合いやコミュニケーション力不足からくる課題などもいわれており、「様々な課題が散見される」との指摘もある(山本、2011)。

そこで本研究では、通常学校における特別支援教育の現状について、グループ学習場面に特化して、グループ学習に困難を示す生徒とそれに対応する教師の指導・支援の実態を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究I

通常学級において、グループ学習に困難を示す生徒が存在し、教師は配慮が必要な生徒の存在を認識しつつも具体的な指導・支援の手立てがわからず苦慮していると仮説して、質問紙によるアンケート調査を行った。

1 目的 通常学校における特別支援教育の実態と教師支援ニーズを明らかにする。

2 方法 次の通りである。

(1) 対象：協同的な学習に全校を上げて取り組んでいる、近隣のA中学校に勤務する教員及び講師

(2) 期 日：2012年2月

(3) 手続き：校内研修会「中学校で出来る最初の特別支援教育」が開会される際、質問紙(資料1)を参加者18名に配布し、回収した。また研修会に参加しなかった講師5名には、後日研修会当日の資料とあわせて質問紙を配布した。

3 結果及び考察 配布した18名全員および講師3名から回答が得られた。回答者の100%から「グループ学習での学びが困難な生徒に気づく」との回答が得られ、そのうち4割が対処が取れたと回答しているものの具体的な手立ては個々によるものであることが示された。また、自由記述から

は、生徒が持つさまざまなニーズに応えることの難しさが示唆された。この結果から、グループ学習に困難を示す生徒のより具体的な実態とそれに対応する教師の指導・支援の実態を明らかにする必要性が示された。さらに自由記述の分析から具体的な調査項目を設定することが出来た。

第3章 研究Ⅱ

1 目的 グループ学習時に困難を示す生徒のうち発達障害を持つ生徒、及び診断はされていないが同様な傾向を持つ生徒の実態を明らかにし、困難を示す生徒に対応する教師の指導・支援の実態を明らかにする。

2 方法 「通常学級でのグループ学習と特別な教育的ニーズに関するアンケート」と題した質問紙による調査を実施する。

(1) 対象：近隣の国公立中学校教員及び講師

(2) 時期：2012年7月

3 結果及び考察 対象者93名、回答者68名、有効回答67名、無効1名、回収率は72.0%であった。

生徒同士が共に学び合うグループ学習時に困難を示す生徒の存在には、回答者の87%が「当てはまる、やや当てはまる」と回答しており、この回答に研修会受講の有無や勤続年数による差異は認められなかった。また発達障害を持つ生徒はクラスに1～3名存在し、診断はされていないが同様な傾向を持つ生徒が各クラスに1～6名存在することが示された。

また生徒が示す困難は、対人関係に関わるコミュニケーション力や社会性にあることが見られた。具体的には自分の意見を言うことが難しい、話し合いの輪に参加するのが難しい、他者の思いを受け止めることが難しい、グループの中での役

割分担に応じるのが難しい、他者の話を聞くのが難しい、グループでの共同作業が難しい、課題にかかわらず、自分の言いたいことばかりを言うてしまう、に集約された。その一方、着席の難しさに関しては該当が少なかった。対象が中学生であることから、行動面では落ち着いてきている、と捉えることが出来るものと思われる。

グループ学習に困難を示す生徒への教師の指導・支援の実態は、多様なニーズを持つ生徒への対応について全体指導と個別指導に限界を感じ、教師間、管理者との連携にもあまり期待せず、生徒同士を関わらせたり、課題設定やグループ構成への配慮など自分でできることで対処を図るのだが、うまくいくときとそうで無いときがあり、具体的な解決策を求めて悩んでいるというものである。また、特別支援教育の研修会を受講することは、直接問題解決にはつながらないものの、問題の所在や対処方法等の知識が得られることが示され、教員対象の研修会の有効性がここに示唆された。

第4章 総合考察

研究Ⅰ、Ⅱの結果は、先行研究の結果を裏打ちするものであり、生徒及び教師の実態をやや具体化できたところに意義を見いだせるものと思われる。今後の課題は教師が求める具体的な手立てを提示することである。特に、全体指導の中での個別指導に悩む教師達にとって、その解決方法は直接解決に結びつく具体的な手立てが求められている。各専門家がチームで治療に当たる医療現場の体制が参考になるとと思われるが、今後各方面からの連携した研究成果が得られることが待たれるところである。

主任指導教員 高野美由紀

指導教員 高野美由紀